

サムエル記下 2 章 1 節～3 章 1 節

2025 年 6 月 25 日(水)

はじめに

本日は、サムエル記下 2 章 1 節～3 章 1 節を学びます。ここには二つの記事があります。一つはダビデがユダの家の王となったことです。もう一つはサウル王の遺児イシュ・ボシェトがイスラエルの王として擁立され、ダビデを王とするユダの家との戦いが起こったことです。

I サムエル記下 2 章 1 節～3 章 1 節の話の流れ。

早速、本日のサムエル記下 2 章 1 節～3 章 1 節を見てみましょう。まず 2 章 1～7 節で、ダビデがユダ地方の王として立てられたことがいわれています。1～3 節では、サウル王の死去に伴い、ダビデがツィクラグから、イスラエルの地にあるヘブロンに行き、そこに住んだことがいわれています。4 節では、ユダの人々が来て、ダビデに油を注いで王としたことが言われています。ここで当時の状況を考えてみましょう。サウルは、対ペリシテ戦で敗北し、討ち死にしました。そのためペリシテ軍はその勢力を維持しイスラエルの地を狙っています。また南からはアマレク人がいつ略奪するかもしれないという脅威がありました(I サム 27:8、30:1～3)。さらにヨルダン川の東では、アンモンがイスラエルの地に侵攻するチャンスをうかがってもあります(I サム 11: 1～11 参照)。そのような状況でしたので、ユダの人々はサウル王亡き後、ダビデを王として守ってもらおうとしたと思われます。また 4 節後半～7 節では、ダビデがヤベシュ・ギレアドの人々に使者を送って自分がユダの王となったことを知らせました。彼らは、サウル王の死後、ペリシテ軍とアンモンの脅威にさらされていたからです。

8～11 節では、亡きサウル王の重臣アブネルが、5 年の年月をかけて、サウル王の遺児イシュ・ボシェトを王として擁立し全イスラエルを支配したことがいわれています。

5 年という歳月が分かるのは、次のように書いてあるからです。イシュ・ボシェトが全イスラエルの王であったのは 2 年間です。他方、ダビデがユダの家の王となったのは、7 年半の間です。ですからダビデが王となって 5 年後にイシュ・ボシェトは全イスラエルの王となったわけです。この 5 年の間に、アブネルは「ギレアド、アシュル人、イズレエル、エフライム、ベニヤミン」の人々に対して、イシュ・ボシェトを王として認めるように働きかけたと思われます。イシュ・ボシェトを王とすると、アブネルは、ペリシテ軍の脅威を考えヨルダン川の東マハナインを拠点としました。

さてサウル王の遺児イシュ・ボシェトが全イスラエルの王となり、いわばサウル王朝となりましたが、ユダの家はすでにダビデを王としていましたので、それに従うことはありませんでした。

そのためイシュ・ボシェトの全イスラエルとダビデのユダの家は戦うことになります。その経緯が 12～32 節までで語られています。

12～13 節では、全イスラエルの将軍であるアブネルがマハナインを出てギブオンに行きました。他方、ユダの家も、ヨアブが家臣を率いて、そこへ行きました。ギブオンには、直径 11.8m、水深 10.8m の貯水池がありました。そこを挟んで両軍は対峙したわけです。

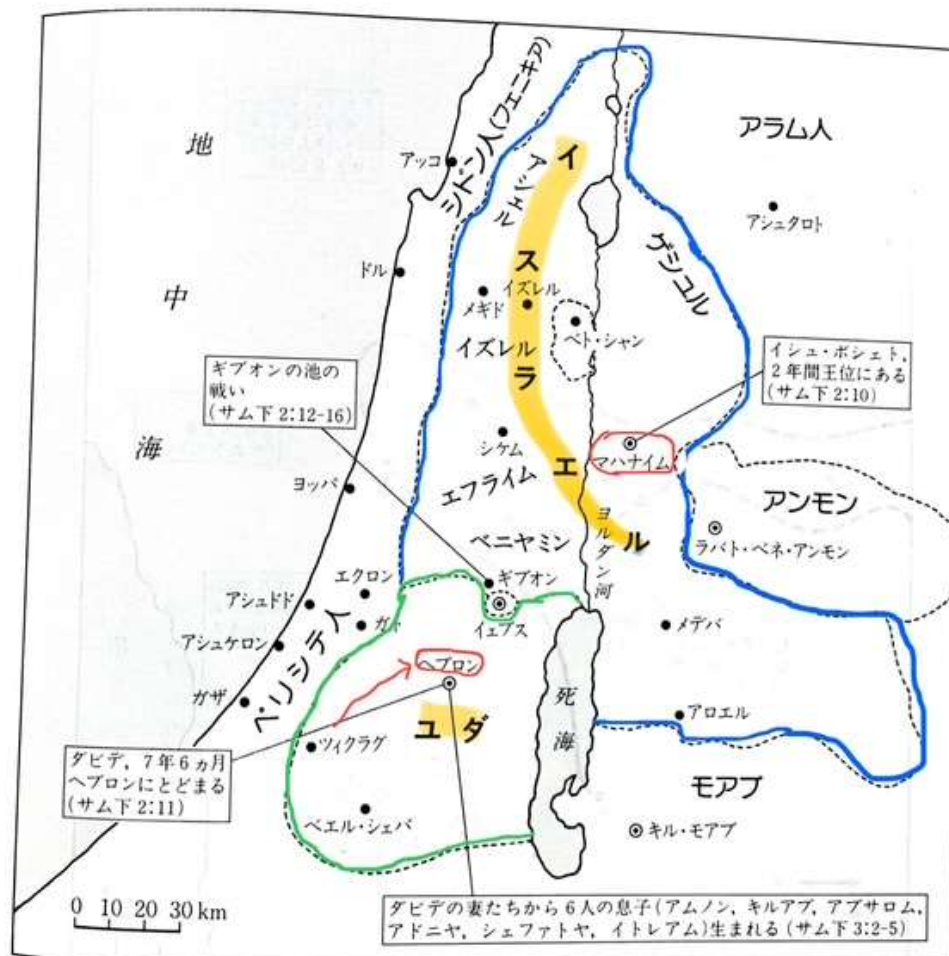
14～16 節。そこでアブネルは、両軍から 12 名ずつ代表者を出し、これに勝負させてはどうかと提案しました。全面衝突を避けるための提案です。ヨアブはそれを了承し、12 名同士の戦いとなりました。しかしこの代表戦では決着が付きませんでした。相打ちに終わったからです。

そのため続く 17～32 節では、全面衝突が起こったことが語られます。その中で、18～24 節ではヨアブの弟アサエルがアブネルを追撃したものの、返り討ちに遭ったといわれています。アブネ

ルは槍の石突きでアサエルを刺し貫いたのです。

こうしたこともあり 25～28 節で停戦となります。29 節では、アブネルとその軍は、マハナインに帰還したといわれています。30～32 節ではヨアブとその軍が、ヘブロンに帰還したことがいわれています。その記事の中で、ヨアブ側は、アサエルを含む 20 名が戦死し、アブネル側は 360 名が戦死したといわれます。それを受けて 3 章 1 節では、「サウル王家とダビデ王家との戦いは長引いたが、ダビデはますます勢力を増し、サウルの家は次第に衰えていった」と言われます。

以上のことを地図で確認してみましょう。青のラインはイシュ・ボシェットの全イスラエル、緑のラインはダビデのユダの家です。赤ラインは、それぞれの王都を指しています。



地図 18 サウルの息子イシュ・ボシェットの王国(イスラエル)とダビデの王国(ユダ) (サム下 2: 8—3: 30)

サムエル記下 2 章は、箇条書きにすると、以下のようになっています。

1. 2 章 1～7 節 ダビデ、ユダの王となる。
 - (1) 1～3 節 ダビデ、ツィクラグを出てヘブロンに定住する。
 - (2) 4 節 ダビデ、ユダの王となる。
 - (3) 5～7 節 ダビデ、ヤベシュ・ギレアドの人々に慰めと励ましの言葉を送る。

2. 2 章 8 節～3 章 1 節 サウル王家とダビデ王家の戦い。

(1) 8～11 節 アブネル、サウル王の遺児イシュ・ボシェトを全イスラエルの王とする。

(2) 12～32 節 サウル王家とダビデ王家の戦い。

(3) 3 章 1 節 サウル王家の衰えとダビデ王家の勢力の増強

II. サムエル記下 2 章 1 節～3 章 1 節の解説

【1～3 節】

サウル王はペリシテ軍と戦い、敗北し、討ち死にしました。ダビデたちは、自分たちを追撃するサウル王がいなくなったので、もはやペリシテの息のかかるツィクラグに在る必要はなくなりました。そこで「イスラエルの地」に戻ることにあります。

この時、ダビデは、「どこに戻るべきか」を主なる神に尋ねています。自分たちを支持する町に戻るといったこともあり得たでしょうが、ダビデはそうしませんでした。主なる神が求めている町に戻することを願いました。つまり自分にとって有利か不利かではなく、主なる神の御心を最優先したのです。ダビデは、自分が王となるのは、世俗の王のような権謀術数や武力などの実力行使ではなく、ひたすらに主なる神の御業によることをよく知っていたからです。

こうしてダビデたちは、ヘブロンに定着することになりました。ここはかつて「逃れの町」と定められたところでもありましたが、何よりもアブラハム・イサク・ヤコブといった父祖の地でもありました。

【4 節】

さてダビデがヘブロンに定着すると、ユダの町々は、ダビデに油を注いで王としました。かつてダビデはサムエルによって油注がれて王とされました（I サム 16:13）。しかしそれは、個人的な出来事でした。しかし今回の油の注ぎは、公のことなのです。注目すべきは、この後に登場するサウル王の遺児イシュ・ボシェトが王とされるのは、アブネルたちの働きによって「擁立された」だけで、油の注ぎの記事はない、ということです。それと対照的に、ダビデは主なる神の御心に従って王とされたのです。

ところでユダの町々の人々が、ダビデを王としたのは、すでに触れたように、西からはペリシテ人の脅威が、東からアンモンの脅威が、そして南からはアマレクの脅威があったからです。サウル王亡きあと、ダビデを王として守ってほしいと願ったと思ってよいでしょう。

【5～7 節】

さてダビデが王となったすぐに、ヤベシュ・ギレアドの人々がサウル王を丁寧に葬ったという知らせが届きます。そこでダビデは、彼らに向かって使者を立てて慰めと励ましの言葉を伝えました。彼らは、ペリシテ軍の脅威を肌で感じてほしいと思われたい。

ダビデは、まずヤベシュ・ギレアドの人々が、主なる神に対して忠実であり、サウル王をきちんと葬ったことに触れ、祝福を祈りました。またダビデ自身、彼らに報いたいと告げています。これは、具体的は、ペリシテ軍やアンモンが脅威を与えることがあれば、助けに向かうということを意味しています。そしてダビデは、特にペリシテ軍の脅威に恐れをいっているヤベシュの人々に「力を奮い起こし、勇敢な者となってください」というのです。そしてかつて主なる神は、サウルを王として立て彼らを守ったように、サウル王亡き後は、ダビデを王として守ってくださる、と告げたのです。

【8～11 節】

他方、サウル軍の司令官、ネルの子アブネルは、サウル王の遺児イシュ・ボエシエトを全イスラエルの王として擁立します。そして王都をマハナインに決めました。いわばサウル王家の存続を考えたのです。そのためアブネルは、ダビデがユダの家の王となった後、五年間、準備をしたと思われる。「ギレアド、アシュル、イズレエル、エフライム、ベニヤミン」に対してサウルの王国を維持するようにと働きかけたと思われます。つまり既に成立した、ユダを中心とするダビデの王国になびかないように、ということです。

しかしアブネルは、イシュ・ボシエトを王として擁立したのであって、油注いで王としたものではありませんでした。つまり世俗の王と同じ扱いをした、ということです。こうしてイシュ・ボシエトは全イスラエルの王となったものの、ユダ地方の人々は、ダビデに従ったわけです。

【12～32 節】

そうした経緯があり、遂に、サウル王家とダビデ王家が激突することになります。これは、来たるべきペリシテ軍との戦いに備えて、どちらが主導権をもつのかを決するための戦いでした。

アブネルは軍を引き連れてマハナインを出て、ギブオンに向かいました。他方、ヨアブも軍を引き連れてヘブロンを出て、ギブオンに向かいました。ギブオンには、当時、直径約 11 km に及ぶ池がありました。人工の貯水池です。そこを挟んで、両軍は対峙したわけです。

そこでアブネルは、全面衝突を避けるために、両軍から 12 名の若者を立て、勝負させようと提案したわけです。アブネルは、いずれペリシテ軍と戦わねばならないため、両者からの被害が少なくなるようにと考えたのかもしれませんが。ヨアブは、その提案を受け入れました。

ところがこの勝負は引き分けに終わったのです。合計 24 名の若者たちが力の限り戦い、死んでいきました。その地は「ヘルカト・ハツリム＝剣の刃の野あるいは火打石の野」と呼ばれました。それを受けて、ついにサウル王家の軍とダビデ王家の軍は正面から激突します。しかし聖書は、その戦闘の様子をすべて語るのではなく、ヨアブの弟アサエルとアブネルの記事を語ります。

アサエルは、「野のもしか」か「ガゼル」のように足が速い人でした。彼は、一心にアブネルを追跡します。アブネルは、アサエルを殺したくなかったので、繰り返し、「**右か左にそれて若者の一人でも捕え、身に着けているものを奪ったらどうだ**」というのです。アブネルは、アサエルを倒したなら、彼は敵将のヨアブの弟でしたから、決定的な戦いになってしまうことを恐れたと思われます。そこでアブネルは追撃してくるアサエルを槍の穂ではなく、槍の石突で突き倒しました。つまりアブネルは向き直ってアサエルに槍の穂を向けたのではなく、走りながら槍の石突をアサエルに向かって突き出したということです。しかしアサエルは勢いがついていきますから、槍は下腹から背中にも突き抜けてしまい、彼は死んだわけです。

こうしたことがあり、アブネルは、ヨアブに向かって停戦を持ちかけます。「いつまで**剣の餌食とし合うのか。悲惨な結末になることを知らぬわけではあるまい。いつになったら、兄弟を追うのはやめよ、と兵士に命じるのか。**」とっています。両軍が激突し相打ちになり、ペリシテ軍が勝利することになることを恐れたわけです。ヨアブも優れた武将ですから、その事をすぐに理解し、停戦に応じたのです。こうした両者は、それぞれの王都に戻りました。サウル王家の側は、360 名の戦死者が出ました。ダビデ王家の側は、20 名の戦死者でした。明らかに、ダビデ王家の勝利です。

【3 章 1 節】

こうしてダビデ王家はますます勢力を増し、サウル王家は衰えていったのです。聖書は、こうした歴史の中に、主なる神の御心が実現していくことを見つめています。